

退官者のひとこと

おかげさまで停年です



金子裕之さん　この3月末に、停年を迎えることとなった。エキスポ'70の年に学校を出て、35年。よくここまで来られたものである。この間、古代史を学ぶ者には垂涎の的である平城宮跡や藤原宮跡の大極殿・朝堂院など古代の宮殿や、法隆寺、興福寺などこれま

た超がつくお寺の数々、さらには長屋王邸など希有な遺跡の発掘に立ち会えたことは、幸いであった。この日を無事に迎えることができることを含め、多くの方々のおかげである。この機会に、お礼を申し上げたい。

それにしても、ここ1・2年、年度末が来るたびに想い起こすのが3年前の老妻の、あのひと言。

「どうするの？」突然のこと、目を白黒させる私。「明日までなら3,500万。4月になつたら500万。だからどうするの、と聞いているの！」

保険金のことだった。掛け金は低いが、期間内に死亡すればそこそこの保険が下りる代わり、過ぎるとガタンと下がる「定期付終身保険」である。めったに病気はしないが、ゴロゴロといつも雷が鳴るわたしのお腹。それを気に病んで若き日の老妻が、幼い子の行く末を案じて、やり繕りしていたのだ。

幸か不幸か（？）こんにちまで命ながらえ、なんとか退職金がいただけそうである。保険金とそれなりに相殺されるせいか、老妻にいまのところ、不満はないらしい。

しかし、一難去ってもまた難題が。

「いま、忙しくて‥」

毎日が日曜日になる4月からは、今までのサボリの理由は通じない。さて、どうするか‥。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　金子　裕之）

退官に寄せて



私は、平城宮跡資料館が開館した昭和45年の夏の終わり頃に採用となり、以来34年余の奈文研生活を送らせていただきました。

入所当時の平城宮跡は、目につく建物として遺構展示館と資料館及び第1・2収蔵庫だけが建設されており、見渡す限り草原だという印象でした。ただ、遠く大極殿土壇上に1本の松が、風雨や火災になんとか耐えて踏ん張っており、平城宮跡のランドマークとなっていました。

平城宮跡資料館は、平城宮跡発掘調査部の庁舎でもあり、各調査室が並んでいました。毎日、その日の発掘調査の状況や問題などが、話題となり、議論され、対策や次の日の行動方針などが熱く語られておりました。発掘調査というものを全く知らなかつた私は、お陰で自然に勉強させてもらえることができました。当時の先輩たちが、大変な個性と平城宮跡に強い思いを持った人たちであり、怖い存在でもありましたが、実に多くのことを教えていただいた思いが強くいたします。

整備では、水鳥が集まる水辺を造り、子連れの水鳥を見た時には本当に癒されたものでした。その後、基本構想の発表もきっかけとなり、平城宮跡の整備事業予算が何段階かで増えていきました。特に平成5年から「朱雀門」及び「東院庭園」の復原が同時にスタートし、これまでにない事業規模にとまどいも多く、研究所あげての取り組みで完成することができました。さらに現在進行中の「大極殿」復原をスタートするまで、参画できた幸運は、私の人生において、まるで三段跳びをしているかのような感じでした。ふり返ってみると、濃い中味であったと思いますが、一瞬だったような気がしております。

先輩方をはじめ、現奈文研の方々、協力いただいた地元の皆様、そして現場で実際に工事を進行していただいた方々など、多大なご迷惑をおかけしたにもかかわらず、気持ちよく応援いただいたことに、強くお詫びと感謝の気持ちで一杯でございます。本当にありがとうございました。

（平城宮跡発掘調査部　渡邊　康史）